

森本桂先生を偲んで

吉武 啓

〒 901-0336 糸満市真壁 820 (国研) 農研機構 九州沖縄農業研究センター (糸満駐在)

先生はゾウムシ上科 (以下、ゾウムシ) の研究者として顕著な業績を上げられる一方で、多年にわたり後進の育成に携わって来られました。九州大学の教員時代、学生として直接先生の指導を受けたゾウムシ研究者としては、沢田佳久博士 (チョッキリ・オトシブミ類) や小島弘昭博士 (ゾウムシ類) がおられます。また、定年退職後も同大学の名誉教授として研究活動を益々活発に展開され、ゾウムシの研究を志す学生を指導されました。その当時、先生の薫陶を受けた学生の一人が私で、博士号取得までの研究テーマを与えていただいたほか、一昆虫分類学徒としてあらゆる面で先生の背中を見ながら育ちました。

また、先生は他大学の学生やアマチュア愛好家とも広く交流を持たれ、ゾウムシに関する基礎知識から最新の知見まで、直接・間接的に広く伝授されました。その象徴がゾウムシ愛好家のバイブルと言える「原色日本甲虫図鑑第 IV 巻」の出版であり、数え切れないほど多くの同定依頼への対応であると言えます。その結果として、妹尾俊男博士 (ヒゲナガゾウムシ類) をはじめ幾人もの研究者が輩出されたほか、全国各地にゾウムシの“パラタクソノミスト” (準分類学者) が育成されたことで、都道府県レベルでゾウムシ類の調査・研究が飛躍的に進展し、日本のゾウムシ相の解明に大きく寄与することになりました。

その他、これまでに先生は植物防疫所や農業試

験場、林業試験場からの同定依頼や講義などに積極的に対応されることで、農学的な見地から行政ニーズにも応えて来られました。戦後に報告された害虫ゾウムシや外来ゾウムシのほぼ全ての同定を先生がされたと言っても過言ではありません。

高齢に達しても、そしてさらに病を得てもなお、決して先生の研究意欲が失われることはありませんでした。先生がとくに愛して止まなかったのはゾウムシの分類学的研究であり、文字通り最期の最期までゾウムシ分類学者としての人生を貫き通されました。ややもすれば挫折しがちな私としてはただただ頭を垂れるばかりです。

先生の存在なしにゾウムシ分類学者としての私は決して成り立ち得ませんでした。その一方、私はゾウムシ分類学者として先生のご期待に応えることができませんでした。残念ながら、今となっては自分の感謝の気持ちも反省の気持ちも直接先生にお伝えすることはできません。あれ以来、先生の言葉や先生と一緒に過ごした時間を思い起こしては感傷的になることの繰り返しです。一研究者としての先生の生き様は間違いなく私の琴線に触れました。先生の足元にも及ばない不肖の弟子ではありますが、せめて私もゾウムシの分類学者として生涯現役であり続けたいと思っています。

先生は、私にとって本当に大きな存在でした。これからもずっとあなたの背中を追い続けながら生きて行くことになるでしょう。決して忘れません。

巨星墜つ

丸山宗利

〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学総合研究博物館

森本先生とは九大大学院の試験 (失敗) 以後から、たびたび学会等でお会いし、励ましをいただいていた。それから縁あって、2008年に現在の職場である九州大学総合研究博物館へ着任した。当時、先生はすでに退官され、現在は取り壊されている

50周年記念講堂という建物の一室で研究が続けられていた。着任当初は時間もあったので、たまにフラッと森本先生の机を訪ねては話を伺うのが何よりの楽しみであり、お話を聞くたびに、その圧倒的な知識と仕事量に、背筋の伸びる思いがし